

安全なママチャリをめざして

アンケート調査からの報告

子育てグッズ研究会 藪田 朋子、飯倉 和代

1. ママチャリは危ない？

99年10月、近所のクリーニング店の前で、前乗せ用の補助イスに1歳11ヶ月になる息子を乗せ、出発しようとしてハンドルを切った時でした。ほんの少しの傾斜にハンドルを取られ、自転車が私とは反対側に倒れ始めました。45度くらいまで傾いたところで店の階段にひっかかり、体勢を立て直すことができました。もしハンドルを握っていなかったら、もし階段に引っかからなかったら、息子はコンクリートの地面に向かって転倒して怪我をしていたことでしょう。近所でも、子供を自転車の後ろに乗せていて車輪に足を巻き込まれ、通院した話を聞いていました。危ないといわれるがやめられない、子供の自転車への同乗。やめられないのなら、乗せられている子供をできるだけ危険から守り、より安全に乗る方法はないものだろうか……。そんな思いで調査を開始しました。

1) ママチャリとは

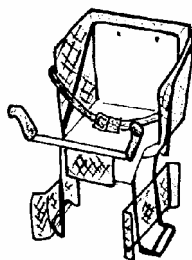
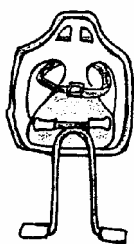
俗にママチャリとは、子供用の補助イスをつけ、子供を同乗させて母親が（父親や祖母のこともあり、一部ではパパチャリなどとも言われます）走る自転車のことをさします。補助イスは、ハンドルにつける前乗せ用や荷台につける後ろ乗せ用が一般的ですが、前カゴ部分に専用の補助イスを設けた子供乗せ専用自転車（以下、前カゴタイプ）もあります。

図1：補助イス、前カゴタイプ

前乗せ用

後ろ乗せ用

前カゴタイプ



2) ママチャリ事故は増えている

自転車に乗せられている子供達が負傷する、ママチャリ事故は増えています。

(財)交通事故総合分析センターによると、6歳以下の自転車同乗中の負傷者数は、93年度には1066件であったものが年々増えつづけ、98年度には、1700件に達し、約1.6倍にもなっています(図2)。同じ6歳以下でも自分で自転車を運転している場合の負傷者数は横ばいかむしろ減っており(表1)、ママチャリに乗せられている子供たちのケガが特に増えていることがうかがえます。

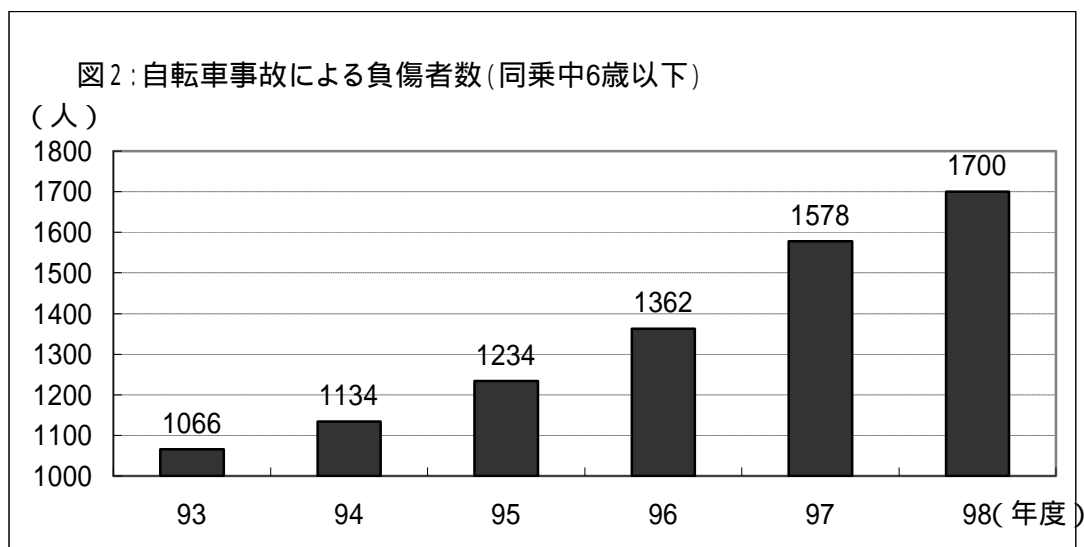


表1：自転車事故による負傷者数(年度別)

		平5(93)	平6(94)	平7(95)	平8(96)	平9(97)	平10(98)
負傷者 数(人)	全年齢合計	128,228	130,806	137,388	140,604	142,559	144,271
	6歳以下合計	4,125	4,212	4,191	4,359	4,362	4,449
	運転中	3,059	3,078	2,957	2,997	2,784	2,749
	*同乗中	1,066	1,134	1,234	1,362	1,578	1,700

(財)交通事故総合分析センター「交通統計」より抜粋

3) 94年の国民生活センターのアンケート調査

国民生活センターでは、94年に首都圏の4つの保育園・幼稚園で、保護者に対するアンケート調査を行い、359名の回答を得ました(国民生活センター相談・危害情報部「自転車事故解析委員会報告書」95年3月)。それによると、普段子供を自転車に乗せている人は83%、用途は多い順に買い物、送迎、遊びで、**同乗させている53%の人が事故を経験して**いました。ケガをした子供のうち、**28%が病院に通って治療を受けて**いました。事故に遭った子供の年齢は、3歳が一番多く、2歳、1歳の順でした。

表2：94年調査の結果概要

事故に遭った子供の年齢	事故の種類(複数回答)	事故の原因
3歳 29% (67 / 228件)	走行中転倒 45%	道路状況・荷物の積みすぎ 21 - 22%
2歳 25% (57 / 228件)	停車中転倒 45%	子供の不注意 13%
1歳 19% (43 / 228件)	後輪巻き込み 22%	
4歳 18% (36 / 228件)		
5歳 7% (18 / 228件)		

同報告書では、アンケートの後に、街頭でのママチャリのビデオ撮影や足巻き込みのテストも行われています。その後、警察や交通安全協会を通じた事故予防のPR活動が行われましたが、自転車に乗せられている子供のケガはこの調査のあとも増えつづけています。

4) なぜ事故は増えているのか

本来、事故統計の個々のデータを解析し、事故急増の前後を比較しない限り事故が増えている理由はわかりません。事故統計を出している(財)交通事故総合分析センターでも個々のデータは不明とのことでした。そこで、なぜママチャリ事故は増えているのかを、目線を変えて考えてみました。

・「少子化で心配性の親が増え、医療機関への受診が増えているためではないか」

(財)交通事故総合分析センターでは、このように事故急増の原因を推察していました。もしそうなら、6歳以下の子供が自分で運転している時の負傷者数が横ばいかむしろ減っているのはどう説明するのでしょうか。軽症例が増えているデータがないとこの理由では納得がいきません。

・「ママチャリの数が増えているのではないか」

自転車用幼児座席へのSGマーク(p32)貼付実績が横ばいである一方で、前カゴタイプの自転車は毎年1.3倍の伸びを示しています(出荷ベース、メーカーヒアリングより)。ママチャリ全体の中で前カゴタイプは1割程度ですが(筆者試算)、少子化の中でも**ママチャリ台数は増える傾向**にあると思われます。しかし1.6倍もの事故の伸びは説明できません。

・「母親が子供を連れて歩く機会が増えているのではないか」

総務庁「国勢調査報告」85(昭60)年、90(平2)年、95(平7)年をみると、核家族は増えています(順に3,001、3,120、3,253万世帯)。しかし6歳未満の親族のいる世帯に限ってみると「母親と子供」世帯がやや増えているものの、「夫婦と子供」世帯は減っています(同433、392、383万世帯)。今年秋の国勢調査結果を待たなければ最近の傾向はつかめませんが、核家族化にママチャリ事故との関連を求めるには無理がありそうです。

一方で子連れのお出かけが盛んになりました。カラオケや居酒屋にも子連れは広がっています。統計がないためはっきりとは示せませんが事故につながる可能性はあるでしょう。

・「ワ・キングマザーが増え、朝晩の保育園送迎時の事故が増えているのではないか」

少子化の折、保育所の在所児数は横ばい(厚生省「社会福祉施設等調査報告」より)です。在所児全体の数は変わりませんが、詳細をみると変化が見られます。90年と96年を比較すると、**低年齢化が進んでいる**のです。年齢が低いほど事故に遭いやすい結果が出れば、この辺にママチャリ事故急増のカギがあるともいえるでしょう。

表3：保育所在所児数

(単位：千人)

0歳		1歳		2歳		3歳～6歳		総数	
90年	96年	90年	96年	90年	96年	90年	96年	90年	96年
23	33	100	137	180	213	1420	1318	1724	1702
	43%増		37%増		18%増		7.2%減		1.2%減

5) 対策は現状を知ることから

事故を防ぐための対策を考えるためには、現状を知ることが不可欠です。私たちは、ママチャリ事故の現状を把握し、乗っている子供達をケガから守る方法を提案することを目的に、アンケート調査を実施することにしました。

2. アンケート調査の方法

1) アンケートの対象者

アンケートの対象者は、以下の3つの方法で希望者を中心に募集しました。そのため、ママチャリ事故に対する関心や安全意識が比較的高い層への調査となっている可能性があります。事故事例に関する項目以外は、ママチャリの全体像を反映しているのではなく、回答者のプロフィールとして結果を集計しましたことをお断りしておきます。

- ・子育てグッズ研究会のメンバーとその知人
- ・2000年2月27日（関東以北、名古屋・東海、北陸の一部）、3月3日（関西、四国、一部を除く中国、北陸の一部）、3月12日（中国の一部と九州）に掲載された朝日新聞の記事による協力者とその知人
- ・ホームページによるアンケート募集に対する応募者

2) アンケートの項目

1	住所、運転者の年齢、子供の年齢と乗る位置など	回答者のプロフィールに相当
2	自転車・補助イスのタイプ、購入後期間、SGマークなど	
3	使用状況：使用目的、使用頻度、子供を同乗させた期間など	
4	事故事例：時期、パターン、ケガの有無と程度、乗車位置など	本調査のメイン
5	知識：道路交通法、SGマーク、TSマーク	知識&意識調査
6	安全に関する装備への意識：ベルト、帽子、靴、ヘルメット	
7	安全確保のために気をつけていること：自由記入	
8	海外事情：自由記入	情報収集のために

3) アンケート期間

2000年2月27日から5月12日（76日間）

4) アンケートの送付及び回収

アンケートは、対象者の希望にあわせて、郵送・手渡し、FAX、電子メールの3つの方法を使い、配布及び回収を行いました。

- ・郵送・手渡し： 配布 251 部、回収 195 部（回収率 78%）
- ・FAX : 配布 45 部、回収 34 部（回収率 82%）
- ・電子メール : 回収 28 部

合計 257 部回収

